

能楽資料学構築に向けた金春家旧伝般若窟文庫の総合的文書調査

宮本, 圭造 / MIYAMOTO, Keizo

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2014-06

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320053

研究課題名(和文) 能楽資料学構築に向けた金春家旧伝般若窟文庫の総合的文書調査

研究課題名(英文) A Comprehensive Textual Examination of Former Komparu-House Documents in the Hannya-kutsu Archive: Toward a Scholarly Discipline of Noh Materials Research

研究代表者

宮本 圭造 (MIYAMOTO, Keizo)

法政大学・能楽研究所・教授

研究者番号：70360253

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,900,000円、(間接経費) 1,770,000円

研究成果の概要(和文)：能楽を伝える最も古い家系である金春家伝来の文書は、能楽資料の宝庫である。今回の研究プロジェクトでは、同文書を総合的な観点から研究するために、金春家旧伝文書の中核を占める般若窟文庫の文書目録をデータ化するとともに、約二千点に及ぶ文書資料のデジタル撮影を行った。これらの成果に基づき、般若窟文庫のほぼ全ての文書の検索と、ウェブ上での画像閲覧が可能な「金春家旧伝文書デジタルアーカイブ」を作成した。また、関連文書の調査として、秋田家文書の秋田城介関連能楽伝書、毛利博物館蔵能楽伝書、吉川広家旧蔵笛伝書などの調査を行った。

研究成果の概要(英文)：The archives of the Komparu house, the oldest lineage in the noh tradition, are a treasure trove of noh materials. In order to research these texts from a comprehensive perspective, we have created a digital catalogue of the Hannya-kutsu Archive, the core collection of documents formerly held by the house of Komparu, while also digitally photographing approximately two thousand documents. Based on these results, we have built a Digital Archive of Documents Formerly Held by the House of Komparu, which allows one to conduct automated searches within almost all documents of the Hannya-kutsu Archive and to view images of them from the web. Moreover, we have conducted supplementary research into related noh materials from the Akita House Documents, noh materials from the Mori House Museum, the flute-related materials formerly held by Kikkawa Hiroie, and others.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：能楽史 謡本 伝書 資料学

様式 C-19、F-19、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

能楽は六百年を越える歴史を有し、今なお日本を代表する古典芸能として息づいている。その長きにわたる歴史の中で、多くの文献資料が書き残され、近代まで伝えられてきた。能楽研究は、これら文献資料に基づいて行われてきたが、その資料の中には、近代における様々な災害のために失われ、今は見ることの出来ないものも少なくない。大正の震災では宝生家や喜多家に伝わる文献資料が焼失したほか、吉田東伍『世阿弥十六部集』の底本となった世阿弥伝書も罹災した。また、先の大戦では、謄本の収集で知られた丸岡桂の猿楽文庫や高安六郎の蔵書が戦火にあって焼失している。現代の我々が見ることの出来るのは、これら幾度の災難をくぐり抜けてきた、ごく限られた資料のみということになるが、なかでも、金春家伝来の能楽資料は、観世文庫の蔵書と双壁をなす、もっとも重要な資料群であるといえよう。金春家は十四世紀から活動が確認できる能役者の家系であり、室町期から近代にいたる膨大な文書を伝えてきた。これほど長期間にわたって活動した能役者の家の資料が、今にまともに残されている例は、先の観世文庫の資料を除けば、世界的に見てもほとんど類例を見ない。

金春家伝来文書は明治期に大部分が奈良県生駒市の宝山寺に移り、その後、昭和になって、世阿弥自筆能本をはじめとする一部の貴重本を除く大半が法政大学能楽研究所に寄贈され、現在は般若窟文庫として保存されている。その寄贈に先立ち、法政大学の表章名誉教授により、昭和三十年・三十一年の二年間にわたる調査が行われ、『宝山寺蔵書目録』と題する仮目録が作成された。しかし、この仮目録は今にいたるも公刊されておらず、法政大学能楽研究所に備え付けられている同目録のコピーをもとに、資料検索が行われているのが現状である。そうした事情から、般若窟文庫はきわめて重要な能楽資料であるにも関わらず、それを研究に活用するのは、能楽研究所を利用する一部の研究者に限られ、日本文学研究に広く活用されてきたとはいえない状況にあった。

以上のような研究動向を踏まえ、まずは、般若窟文庫の能楽資料が広く利用できる環境を整備する必要があると考え、本研究を着想するにいたった。

2. 研究の目的

般若窟文庫にはどのような能楽資料が存在するのか。それを多くの研究者が知ることが出来るようにするには、般若窟文庫蔵能楽資料をウェブ上に公開することが有効である。そこで、本研究では、般若窟文庫の能楽資料の文書調査を行い、資料目録データベースを作成するとともに、これをウェブ上で公開し、広く日本文化研究に供することを目的としている。

また、般若窟文庫蔵の能楽資料の点数は

二千五百点近くに達する膨大なものであるが、従来の研究は、個々の研究者が個別のテーマ・関心に沿って、般若窟文庫の一部の資料を取り上げて論考を発表してきたに過ぎなかった。しかしながら、般若窟文庫の各能楽資料は、それぞれが単独に存在するのではなく、金春家の長年にわたる演能活動の中で集積されてきた、有機的な結びつきを持つ「資料群」である。例えば、般若窟文庫には、能の演出や心覚えを書き留めた一枚物の資料がきわめて沢山残されているが、これらは特定の催しにおける上演という実際上の必要に迫られて書き留められたものが多い。そこには年記などないのがほとんどであるが、同じ般若窟文庫に所蔵されている能の番組や、役者の日記によって、いつ、どこで行われた能の上演に際しての書留であるのかを突き止めることが可能であり、このような作業を通じて、能の演出が、具体的な演能の場においてどのように変遷していったのかを知ることが出来るのである。

しかし、こうした様々な資料を一人の研究者が総合的に考察することは、きわめて困難である。能楽研究は細分化が著しく、とりわけ謄本や演出資料などの解読には、高度な専門的知識が必要とされるからである。そこで、本研究では、謄本・演出資料・能楽史・伝書・能楽論のそれぞれを専門とする研究者による研究グループを組織し、専門的知識に基づく詳細な文書調査を行い、その成果を研究グループ内において共有することで、各資料の有機的な結びつきを具体的に明らかにすることを旨とするものである。さらに、これらの研究成果に基づき、個々の能楽資料の作成背景を探るとともに、それが資料群として形成されていく過程を可能な限り明らかにし、その上で、能楽資料の持つ特殊性・普遍性を解明して、「能楽資料学」という新たな研究分野を構築することが、本研究の最終的な目的である。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、般若窟文庫の能楽資料の目録作成、同資料のデジタル撮影を二つの柱として研究を進める。

(1) データベース化に向けた目録の入力

般若窟文庫の本格的な文書調査に先立ち、まず、表章氏により作成された手書きの目録をもとに、エクセルファイルのデータ入力を行う。データ入力には、研究協力者のほか、大学院生の協力を仰ぎ、本年度の早いうちに作業を完了する。同時に、原資料との照合を進め、資料名の再検討や分類の見直しを行い、必要に応じて、新たな資料番号を付すなどする。

(2) 般若窟文庫蔵の文書資料の撮影・デジタル化

資料保存の観点から、原本による調査は必要最小限にとどめ、デジタル撮影画像に基づき、調査を進めることとする。そのため、(1)

の作業終了後、般若窟文庫蔵資料のうち、重要なものについては順次、業者に依頼してデジタル写真撮影を行い、ハードディスクないしDVDディスクに保存するとともに、そのコピーを作成し、研究グループで共有する。平成22年度と23年度はそれぞれ冊子本を中心に三百点ほどの資料の撮影を、平成24年度は一枚物を中心に六百点ほどの資料の撮影を、平成25年度は冊子本を中心に撮影を行う。

(3) 関連する能楽資料の調査・撮影

般若窟文庫の資料と関連する全国各地の能楽資料についても、広く調査を行う。まず、般若窟文庫と同じ伝来を持つ金春家旧伝文書のうち、所在が明らかなものについて、網羅的な調査を実施して、撮影を行うとともに、資料目録を作成する。また、文書資料に限らず、東京国立博物館が所蔵する金春家旧蔵の能面・装束についても調査を行い、金春家がかつて所有した文書・能道具の全容がどのようなものであったかの把握に努める。その他、金春家が各大名や弟子に伝授した伝書や演出資料などについても、新出資料の発掘をめざし、調査・撮影を行う。

(4) 研究の総括

上記撮影画像に基づき、研究代表者・分担者・研究協力者の計七名が、謡本・演出資料・歴史資料・伝書・能楽論と、それぞれの専門分野ごとに資料を調査し、最終年度までに資料目録のデータベースを完成する。また、グループ内で共有した研究成果に基づき、般若窟文庫の能楽資料に関するシンポジウムを開催する。

4. 研究成果

(1) 般若窟文庫の目録データ作成

般若窟文庫の全体像を明らかにすべく、四年間の研究期間で総合的文書調査を行った。とりわけ力を注いだのが、約二千五百点に及ぶ膨大な資料の目録作成と、画像資料のデジタル化である。目録については、すでに表章氏によって作成された仮目録があるが、いまだ公刊されておらず、一般には利用が困難であった。そこで、表氏の許諾を得て、同氏作成の目録を新たに入力し、データ化することから始めた。

また、資料全点について原本照合を行うとともに、仮目録の解題についても新たに原本調査に基づき、記載内容の見直しを行った。分量が膨大であるため、資料全点の解題見直しには至っていないが、目録データに関しては、平成24年度までに仮目録のデータ化を実現した。

(2) 般若窟文庫資料の撮影とデジタル化

上記目録データを作成するのと並行して、資料の撮影とデジタル化を行った。平成22年度には伝書、平成23年度には型付、平成24年度には史料、平成25年度には謡本、と計画的に撮影を進めた結果、全二千五百点

の大半の資料につき、撮影とデジタル化を完了することが出来た。

(3) 関連文書の調査

法政大学能楽研究所には般若窟文庫以外にも、金春信高氏から寄贈された世阿弥伝書、金春欣三氏から寄贈された戦国期能伝書など、他にも金春家旧伝文書が数十点所蔵されている。これらの文書についても、目録を作成するとともに、撮影デジタル化を行った。

また、金春家に関連する能楽資料として、個人蔵の金春大蔵家伝書、大阪天満宮蔵の江戸期社家日記、金春流下間少進の弟子であった大名秋田城介関係の能楽資料、毛利博物館蔵の能楽伝書、岩国吉川広家旧蔵の笛伝書などの調査・撮影を行った。

(4) 金春家旧伝文書デジタルアーカイブの作成とシンポジウムの開催

上記の研究成果に基づき、目録データと撮影デジタル画像をリンクさせ、データの書誌情報から画像検索が可能な「金春家旧伝文書デジタルアーカイブ」を作成した。資料名・資料の種別のほか、キーワード検索により、金春家旧伝文書へのアクセスが格段に容易になるコンテンツであり、今後の能楽研究への活用が大いに期待される。

また、研究期間中には開催が実現しなかったが、本研究の成果公開の一環として、平成26年9月に「金春家文書の世界」と題するシンポジウムを計画している。本研究グループの宮本・石井・山中が登壇するほか、現金春宗家にも登壇いただく予定である。同時に金春家文書の公開展示も行い、今回の研究成果を一般に還元することとしている。それに向けて、現金春宗家所蔵の文書調査も平成26年度5月から始まった。これらの文書の中には、般若窟文庫の離れと推測される資料も多く含まれており、平成26年度に完了する見込みの現金春宗家文書の悉皆調査の後には、名実ともに金春家文書の全体像が明らかになるものと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ①宮本圭造、能・狂言と絵画、能楽研究、37号、2013、49-110、査読無
- ②宮本圭造、幕末維新期の京都能楽界、神戸女子大学古典芸能研究センター紀要、5号、2012、13-30、査読無
- ③宮本圭造、武家手猿楽の系譜、能楽研究、36号、2012、29-64、査読無
- ④宮本圭造、呪師走りと「翁」、日本文学誌要、84号、2011、29-40、査読無
- ⑤宮本圭造、臼杵藩の能楽史、国立能楽堂調査研究、5号、2011、7-39、査読有

⑥宮本圭造、能舞台の歴史と変遷、演劇映像学2009、2号、2011、97-120、
査読無

⑦宮本圭造、戦国期能伝書の伝来をめぐる一考察、能楽研究、35号、2011、1-98
査読無

[学会発表] (計 4 件)

①宮本圭造、能楽は日本固有の芸能か、国際日本学シンポジウム、2013年11月2日、
アルザス欧州日本学研究所

②宮本圭造、江戸初期謡本筆者考、能楽学会
例会、2013年9月24日、法政大学

③伊海孝充、玉屋謡本考、能楽学会例会、2
013年9月24日、法政大学

④宮本圭造、辻能考、能楽学会例会、201
0年6月22日、法政大学

[図書] (計 3 件)

①宮本圭造 (共著)、『栗谷家所蔵能面選』、
便利堂、2014、42-49

②高橋悠介、『禅竹能楽論の世界』、慶應義塾
大学出版会、2014、1-472

③宮本圭造 (共著)、『浸透する教養』、勉誠
出版、2014、163-192

[その他]

ホームページ等

<http://nohken-komparu.hosei.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮本 圭造 (MIYAMOTO Keizo)

法政大学・能楽研究所・教授

研究者番号：70360253

(2) 研究分担者

伊海 孝充 (IKAI Takamitsu)

法政大学・文学部・准教授

研究者番号：30409354

高橋 悠介 (TAKAHASHI Yusuke)

神奈川県立金沢文庫・学芸課・学芸員

研究者番号：40551502

石井 倫子 (ISHII Tomoko)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：50328887

山中 玲子 (YAMANAKA Reiko)

法政大学・能楽研究所・教授

研究者番号：60240058